

独思録：「夜寒な今の社会」(12/29)

日経は11月28日の社説で、「景気二番底の防止に政府は全力挙げよ」と題し、「世界的な為替、株式市場の混乱にのみ込まれるように、日経平均株価は9000円台に急落した。

グローバルな危機連鎖を防ぐために、日米欧7カ国(G7)を中心に金融と市場の安定化策を打ち出すよう、日本は働きかける必要がある。日本は財政、金融政策で当面の景気失速を防ぐときだ。中長期の成長戦略も早急に明示し、企業や家計が安心して設備投資や消費をできるようにすべきである。」

と述べ、「市場安定へ緊急G7を」「政治決断要る中長期策」という提言を行なっています。

しかし、各紙の社説は何時もそこまでで、具体的な計画案など更に踏み込んだ提言はあまりありません。

正岡子規に「夜寒十句」と言うのがあります。

「虚子を猿楽町に訪ひて夜に入りて帰途に就く。小川町に出づるに男女豎にも横にも歩行(ある)きて我車ややもすれば人に行き当らんとする様なり。彼等の半は両側の夜店をあさり行くにぞある。考へて見れば今宵は五十稻荷の縁日なり。我昔こゝらにさまよひし頃は見んとも思はざりし夜店なれど、此頃は斯(かか)る事さへなつかしく店々こまかに見もて行かんと思ふに実にせんなき身とはなりけり。」

という行から始まり、

縁日の古著屋多き夜寒かな(背広をも新調できない世寒かな)
きんつばの行燈暗き夜寒かな(甘党をメタボで脅す世寒かな)
贗筆を掛けて灯ともす夜寒かな(仏像を盗んで稼ぐ世寒かな)
柿店の前を過ぎ行く夜寒かな(果物も手が出ぬ価格世寒かな)
三階の灯を消しに行く夜寒かな(省エネも格差で出来ぬ世寒かな)
電気燈明るき山の夜寒かな(盛り場は誰が豪遊世寒かな)
見下せば灯の無き町の夜寒かな(国民の竈も苦し世寒かな)
交番の交代時の夜寒かな(警察が事件で多忙世寒かな)
櫛の木の中に灯ともる夜寒かな(コンビニの明かりも侘し世寒かな)
暗やみに我門敲く夜寒かな(老々の介護も悲惨世寒かな)

という上記の10句が載せられています。(真似て拙十句題して「世寒十句」)

正岡子規を研究されている方々には異論があたりと思いますが、上記10句、高浜虚子宅を訪れ、五十稻荷の縁日を見ながらの帰宅の途に浮かんだようですが、「夜寒」という題からか、暗く感じられ、今の世相そのもの「世寒」を表しているような気がします。

高浜虚子と俳句談義を交わした楽と、「夜寒」という暗さ(悲しさ)との落差、今の一般庶民が、友との一瞬の楽しい酒と現実を忘れた談笑の後、友と分かれ、酔いも醒め、現実に戻された時の侘しさを実感する10句のような気がします。

日経社説は、最後に

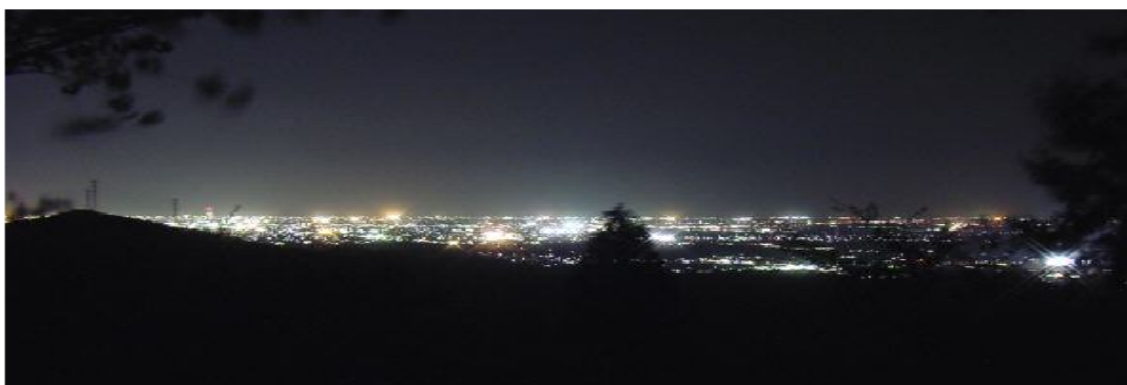
「アジアの成長力を取り込むには、通商の自由化を本気で進めなければならない。東南アジア諸国と結んだ経済連携協定は不十分で、日本製工業品への関税が、世界貿易機関（WTO）の協定に基づき引き下げた関税率を上回るといった、おかしなことが起きている。これは日本が農産物の市場開放や外国人材の受け入れなどを渋ったことが大きい。短期的な財政・金融策と同時に出すべき中長期策の多くは重い政治的決断を伴う。自民党政権下では進まなかった様々な改革に新政権がどこまで手をつけられるかが問われる。」と結んでいます。

この結論、各紙の社説では、時には賛成、時には反対の論陣を張ってしたのではないかと思います。何処かの新聞社の広告に、新人社員が、「新聞の記事を読んで助かった」というようなのがあったと思います。しかし、助かったと思ったことは皆無です。新聞の記事だけで助かるような甘い現状でもありません。

過去のことは忘れ、現実には「景気二番底の防止に政府は全力挙げよ」ということは間違っていないと思います。国民はそれを望んでいます。

民主党には経済の専門家がないとの声も聞きます。今こそマスコミの中で、経済の専門家であるという自負を持つ各紙の踏み込んだ具体案の提示を期待します。

正岡子規の「夜寒十句」のような寒さ、国民はもうこれ以上我慢でないと思います。



日経：「世界の金融市場、振れ幅大きく 円、1週間で4円変動」(11/29)

世界の株式市場は今週末にかけて波乱の展開となった。米国景気への先行き警戒感に加え、週半ばにアラブ首長国連邦（UAE）ドバイ首長国の信用不安が台頭。日経平均株価は週間で4.4%（416円）下落し、欧米アジア市場の株価が軒並み軟調な展開となった。一方、外国為替市場ではドル売りが活発になり、円相場は対ドルで一時14年4カ月ぶりに1ドル＝84円台まで急伸。週間の変動幅は4円強とほぼ5カ月ぶりの大きさだった。

日経平均は週末の27日に301円安と急落。今週の終値は9081円52銭と7月13日につけた安値（9050円33銭）に迫った。政府のデフレ宣言や金融機関、企業による増資ラッシュでもともと軟調だったところに、ドバイ・ショックや急速な円高・ドル安が重なり、投資家が持ち高を圧縮する動きが強まった。



< 正岡子規 (1867-1902) >

俳人、歌人。

俳句・短歌・新体詩・小説・評論・随筆など多方面に渡り創作活動を行い、日本の近代文学に多大な影響を及ぼした、明治時代を代表する文学者の一人である。

子規は日本に野球が導入された最初の頃の熱心な選手でもあり、明治22年(1889年)に咯血してやめるまでやっていた。ポジションは捕手であった。自身の幼名である「升(のぼる)」にちなんで、「野球(のぼーる)」という雅号を用いたこともある。

また「まり投げて見たき広場や春の草」「九つの人九つの場をしめてベースボールの始まらんとす」などと野球に関係のある句や歌を詠むなどしており、野球の普及に貢献したとして平成14年(2002年)野球殿堂入りを果たした。

死を迎えるまでの約7年間、結核を患い、「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」「をとゝひのへちまの水も取らざりき」という辞世の句を残している。

子規の忌日9月19日を「糸瓜忌」、雅号の一つから「獺祭(だっさい)忌」ともいう。



< 高浜虚子 (1874-1959) >

俳人、小説家。本名・高濱清。愛媛県松山市生まれ。

伊予尋常中学(現在の愛媛県立松山東高校)在学中、正岡子規に兄事、俳句を教わり子規より虚子の号を受ける。

柳原極堂が松山で創刊した俳誌「ほととぎす」に参加。後に、虚子が引き継ぎ東京に移転し俳句だけでなく、和歌、散文などを加えて俳句文芸誌として再出発。

ほととぎすの理念となる「客観写生」「花鳥諷詠」を提唱。

子規の死後、俳句の創作を辞め、その後は小説の創作に没頭。

句集に『虚子句集』『五百句』『五百五十句』『六百句』『虚子俳話』『句日記』、小説集に『鶏頭』『柿二つ』『俳諧師』『虹』など。



春秋：「為替介入という名刀」(11/28)

秋空のどこからか、1匹のトンボが飛んで来る。羽を休めようと、ふと選んだ場所が悪かった。武将が立てた槍(やり)の先っぽにとまった途端に、スーッと真っ二つ。戦国時代の三河の名将、本多忠勝が愛用した長槍「蜻蛉切(とんぼきり)」の逸話である。

岡崎公園にその複製が展示してある。長さ6メートルもあったらしい。戦場ではさぞ目立ったことだろう。忠勝は関ヶ原の戦いまで57回もの合戦に加わったが、一度も手傷を負わなかった。「蜻蛉切」を遠くからみとめると、敵の雑兵はあわてて逃げ出したという。槍というより、忠勝の存在が恐ろしかったに違いない。

触れれば切れるという伝説が、道具の持ち主をさらに強くする。通貨の番人である財務省と日銀はどうだろう。世界中にあふれたマネーが暴れる外国為替市場は、現代の戦場だ。通貨当局の腰には、為替介入という名刀がある。むやみに振り回すのは考えものだが、切れ味が悪いと見られているとすれば情けない。

過去に介入で手痛い目にあった銀行の外為担当者から、こんな思い出話を聞いた。日銀との直通回線のランプが点滅すると、背中に冷たいものが走る。「いまいくらですか」と聞かれれば、介入の合図。その無機的な声が恐ろしかったという。日本経済を守る番人の任は重い。常に恐れられるほどの凄(すご)みがほしい。

<本多忠勝(1548-1610)>

徳川氏の家臣。三河国蔵前(現在の愛知県岡崎市)で生まれる。上総大多喜藩及び伊勢桑名藩の初代藩主。

徳川家康に仕え、永禄3年(1560年)の桶狭間の戦いの前哨戦である大高城兵糧入れで初陣、姉川の戦い、三方ヶ原の戦い、長篠の戦いなどで勇名を馳せ、本能寺の変が起きたときには、堺に滞在していたが「伊賀越え」を進言し家康の窮地を救い、関ヶ原の戦いで諸大名に書状を送って東軍方につける工作など権謀を發揮した。



織田信長に「花実兼備の勇士」と、豊臣秀吉には「東に本多忠勝という天下無双の大將がいるように、西には立花宗茂という天下無双の大將がいる」と、更に、狂歌の落書でも「家康に過ぎたるものは二つあり、唐のかしらに本多平八」と賞賛している。

天声人語：「美談で救えるもの？」(11/24)

勤労感謝の日、東京の芝公園で野宿者への炊き出しをしていた。昨冬の「年越し派遣村」で救われた人たちが、恩返しにと一肌脱いだそうだ。日比谷公園の列に並んだ男性が、この日はご飯や豚汁を配る側にいた。

いい話には「再訪もの」が結構ある。20年前の「一杯のかけそば」を覚えておられようか。大みそかのたびに年越しそばを分け合う母子3人を、そば屋の夫婦はひそかな大盛りで応援した。来店が絶えて久しい年の瀬、近所の皆が母子に思いをはせる店に、医者と銀行員になった息子たちが老母と現れる。

泣かせどころ満載の、よくできた話だった。実話という触れ込みも筋に力を与えた。当時はバブル経済の絶頂期。感動の押し売りと言われようが、お金で買えない人情に世の中が飢えていた。

再訪の孝行息子たちは、人生最大のぜいたくだとかけそば3杯を注文する。このラストまで読み返し、えも言われぬ違和感が残った。恋しいほどの清貧も、現実の貧しさが生々しすぎて安っぽく映るのだろうか。

日本では6人に1人が貧困とされる。「かけそば」のような一人親世帯に限れば、主要国では最悪の5割超が貧困層という。とりわけ、親の仕事が不安定な母子家庭は厳しい。炊き出しに並びたい親子もいるに違いない。

弱者が弱者を支える光景は胸に迫るが、それは公の無策の裏返しでもある。日本経済がデフレ状況にあると認めたからには、消費がさらに縮こまらないよう、家計と雇用を温める政策を最優先してほしい。この貧困、美談で救えるものではない。

<一杯のかけそば>

栗良平の短編小説で、1989年2月17日に行われた衆議院予算委員会審議において、公明党の大久保直彦衆議院議員が竹下登首相に対する質疑で、当時話題となっていた本作のほぼ全文を朗読・紹介して、リクルート問題に関する質問をし、ブームに拍車がかかった。

しかし、その後、栗良平が全国で寸借詐欺をして回った容疑で逮捕されたため感動話と同時に「詐欺話」という扱いを受けた後日談もある。

映画化もされ、公開当時は「文部省選定作品」になっている。



編集手帳：「デフレの雨」(11/28)

作家の獅子文六に、元実業家の伯父さんが心配そうな顔で「フルかなァ」と言った。雨のことかと思って聞き返すと、「いや、インフルか、フランかということさ」、そう答えたと『へなへな随筆』(文芸春秋新社)に書いている。

戦前、昭和10年代の話という。お金の価値が下がり、物の値段が上がるインフレにはどこか燃え上がるイメージがあり、鬱陶(うっとう)しい雨はむしろデフレだろう。

政府は日本経済がデフレ状態にあることを公式に認めている。「デフルか、デフランか」の時はすでに過ぎ、雨がいつあがるかに世の関心は集まりつつある。

デフレはローンを抱えた人たちを鞭(むち)打つ。お金の価値が低いときにこしらえた借金を、価値の高いお金で返済しなくてはならないからである。公共事業を削ることに熱心な鳩山内閣だが、一時的には志と逆向きに、舟でいえばデフレ退治の“逆櫓(さかろ)”を漕(こ)ぐ判断も必要になるだろう。

ミゼラブル(悲惨な)という英単語を見て、ミゾレフル 曇(みぞれ)の降る冬の情景を思い浮かべたのは徳富蘆花『思出の記』の主人公だった。デフレの雨も、無策がつつけば冷たいミゾレに変わる。

<獅子文六(1893-1969)>

小説家、劇作家、演出家。本名・岩田豊雄。演劇の分野では本名で活動。横浜弁天通生まれ。



慶應義塾大学理財科予科中退し、フランスに渡って演劇を勉強。帰国後、岸田國士、久保田万太郎と劇団文学座を創立。

小説家として、真珠湾攻撃の「九軍神」の一人を描いた『海軍』で朝日文化賞受賞、『てんやわんや』などのユーモア小説を数多く書き、連載小説『娘と私』はNHK朝の連続テレビ小説になった。

また、多くの作品がラジオドラマ化、テレビドラマ化、映画化などがされ、『自由学校』が松竹(渋谷実監督)と大映(吉村公三郎監督)で競作映画化、『青春怪談』が日活(市川崑監督)と新東宝(阿部豊監督)で競作映画化されるほど、人気を博した。

その他作品に『悦ちゃん』『達磨町七番地』『信子』『南の風』『おばあさん』『大番』『箱根山』『父の乳』など。

<徳富蘆花(1868-1927)>

小説家。探偵小説。本名・徳富健次郎。熊本県水俣に生まれ。

蘆花の由来は清少納言の『蘆の花は見所とともなく』から。

キリスト教の影響を受け、トルストイに傾倒、自然詩人として出発し、小説『不如帰』はベストセラーになり、エッセイ『自然と人生』で人気作家となる。



国家主義的傾向を強める兄の蘇峰とは不仲となり、「告別の辞」を発表し、絶縁状態となる。

作品に『灰燼』『黒い目と茶色の目』『思出の記』『黒潮』『寄生木(やどりぎ)』『みみずのたはこと』など。

余禄：「ウェルテルの悩み」(11/28)

岩波書店を創業した岩波茂雄が一高生のころ暮らした家は友人に「悲鳴窟(ひめいくつ)」と呼ばれた。彼が人生に煩悶(はんもん)し、学業も放り出したきっかけは後輩の藤村操の投身自殺だった。岩波は遺書「巖頭之感」を読み泣き暮らした。

「万有の真相は唯(た)だ一言にして悉(つく)す、曰(いわ)く『不可解』」。この遺書を木に彫り残して華巖の滝で身を投げた藤村は当時18歳、若き秀才の厭世(えんせい)自殺は世に衝撃を与え、青年の後追い自殺が続出した。「ウェルテル効果」と呼ばれる連鎖自殺だ。

ゲーテの「若きウェルテルの悩み」の発表当時、作品の影響で若者の自殺が続発したことから命名である。ただゲーテその人は自らの分身である主人公の自殺を書くことで悩みを脱したのだから、後追いた若者らは何とも気の毒である。

子供が大人になるまでには深く、暗い森をさまよわねばならない。なかには死の誘惑をささやきかける魔の淵(ふち)もある。だが今年の学生・生徒の自殺者数が前年を100人近く上回り、調査開始以来最高の972人に達したのはどうしたことか。

要因の一つは今年の硫化水素自殺の続発で、暗示にかかりやすい若年層が報道に影響されたためといわれる。従来のウェルテル効果といわれる事例でも自殺方法の連鎖は起こっている。また経済不安や社会の閉塞(へいそく)感が青少年の心に想像以上に暗い影を落としているとの見方もある。

岩波は藤村の自殺の現場から下をのぞきこんだが、母が頭に浮かび投身を思いとどまった。魔の淵に立つ若者や子供には、どうかこの世と自分をつなぐものに目を凝らし、耳をすましてほしい。その淵を抜ければ自分がこの世でなすべきことが分かる日は必ず来る。

< 岩波茂雄 (1881-1946) >

岩波書店創業者。長野県諏訪郡中洲村(諏訪市中洲)生まれ。

東京帝国大学哲学科選科卒業後、神田高等女学校(現在の神田女学園)に教員として奉職するが退職、神田区南神保町に古本業岩波書店を開く。

夏目漱石の知遇を得て1914年に『こゝろ』を出版、岩波書店の基礎を築き、『思想』『科学』『文化』などの雑誌発行や「岩波文庫」を創刊した。

社のマークは働く姿を描いたミレーの「種をまく人」をイメージしたものとされている。



< ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749-1832) >

ドイツを代表する文豪。詩人、劇作家、小説家、哲学者、自然科学者、政治家、法律家、ドイツ中部フランクフルト・アム・マイン生まれ。

ヴァイマル公国で宮廷顧問・枢密顧問官・政務長官(宰相)を歴任。

その後、シュタイチタリアへの旅行などを経て古代の調和的な美に目覚め、『エグモント』



『ヘルマンとドロテア』『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』などを執筆、シラーとともにドイツ文学における古典主義時代を築く。

シラーの死を経た晩年も創作意欲は衰えず、公務や自然科学研究を続けながら『親和力』『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』『西東詩集』など円熟した作品を成した。

大作『ファウスト』は20代から死の直前まで書き継がれたライフ・ワークである。

ほかに旅行記『イタリア紀行』、自伝『詩と真実』や、自然科学者として「植物変態論」「色彩論』など、多くの著作を残している。